

2024

令和6年12月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻376号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあそび



公益財団法人



公益財団法人
さわやか福祉財団

いつもご支援を ありがとうございます

さわやか福祉財団は、皆様のご寄付によって活動しています。

さわやかパートナー（賛助会員）、

1回ごとに金額をお決めいただける一般ご寄付、
地域助け合い基金、遺贈寄付によるご支援など

さまざまな形でお受けしています。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

誰もがいきいきと暮らせる地域共生社会をつくりましょう



個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、

どなたでもお申し込みいただけます。

税制優遇措置もあります。

詳しくは、本文50ページをご参照ください。

■ ご寄付全般に関するお問い合わせ ■

電話 (03) 5470-7751

メール mail@sawayakazaidan.or.jp

ともあそび

2024年12月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

地域活動と行政の資金支援

清水 肇子

4 報告 いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024

12 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

支え合い、心をつなぐための地域づくり

NPO法人福祉亭（東京都多摩市）

18 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

ひとりぼっちをつくらない

ごちゃまぜの居場所

みんなのいえカラフル（大分県竹田市）

24 居場所のつながりを地域へ「実家の茶の間・紫竹」終了プログラム 3

「地域の宝になる」 ―最終日の茶の間で―

さわやか福祉財団常務理事 共生社会推進リーダー 鶴山 芳子

32 連載 共生社会 ―認知症との新しい向き合い方 8

認知症の症状と、認知症の人の世界を理解する ―その3―

社会医療法人財団石心会理事長・川崎幸クリニック院長 杉山 孝博

34 連載 人生100年 地域とつながる施設とは 8

「老いる」を支える ～認知症①～

公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

新しいふれあい社会づくりに向けて

28 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介／状況のご報告

38 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

39 活動日記（抄）

㊦「ともあそび」ツール紹介

㊧財団ツール紹介

㊨みんなの広場 / 投稿募集

㊩さわやかパートナーのご案内 / 表紙絵から

地域活動と行政の資金支援

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

今年も心痛む自然災害が多く発生した。能登半島の被災地は豪雨被害が続くなど一日も早い復旧復興を願いつつ、しかしまだ相当な時間がかかることが想定される。自然が豊かな日本だからこそ明日は我が身。知恵を絞り、皆で備えのあり方を考えていかなければならない。

被災地支援はかつては行政や専門職による取り組みが大半だった。今では、それぞれの段階でノウハウを持つ非営利団体や企業といった民間の力も相当な役割を担ってきている。予想し得ない災害時に不可欠な柔軟さと即応性という民間の強みを最大限に生かせるからだ。

そして、同様のことは平時の地域での助け合い活動にもいえる。本誌でも重ねて報じているとおり、複雑化・複合化した生活支援ニーズに対し、公的な支援だけでは質量共にまったく不足することが明白なこれから、地域で柔軟に支え合う活動が強く求められている。

その点で一つ、従来からの課題だが、地域活動を行う非営利組織と行政との資金的関係を考えてみたい。行政からの資金支援は、委託、交付金、補助などがあるが、数十年前から「協働」という概念が広がってきた。これは社会や地域の課題に対して、複数の組織体が対等の立場でそれぞれの役割を担って一緒に進めるものだ。言葉は相当に浸透してはいる。しかし地域で人

を支援する取り組みでいえば、協働による非営利活動が大きく進んでいるという躍動感はない。中には協働という名の下、委託と変わらない形で行政が資金を出し、下請け的に行われているものもある。大切な税金だからしっかりと有効に使うことは大前提だが、行政が過度に使いながら活動の仕方まで縛っているようでは、本来求めていた民間や住民の力は生きてこない。

一方で、非営利活動と公的資金の関係性については、意識自体を社会全体で次の段階に変えていく時であるように感じている。非営利活動や住民の取り組みに公的資金を入れること自体に抑制的な意識がまだまだある。だから支出する場合に行政からの支配的な構図となりやすい。非営利の活動は自発的な思いに基づくもので、自主財源づくりに努力することはもちろん基本であり、当財団も皆さんのご支援で必要な活動を行っていることは本来にありがたい。

その上で、災害への支援や介護ニーズに対応するための生活支援然り、こと喫緊の課題である社会課題については、協働の役割分担の考え方もっと深めて取り組むべきではないか。たとえばNPOの活動で行政のお金をもらっていないことが評価される。一面正しいが、なぜ正しいかといえば、従来の委託型を前提とした意識で「自立して依存していない」ことの指標とされてきたからだ。しかしこれからは、外形的にただ見るのではなく、社会や地域の中で何を担い、どのように活用して実施しているのか、その中身で判断すべきだ。

社会構造が大きく変わり、一人暮らし高齢者も認知症の方もどんどん増えていく。地域で支え合う仕組みの中に互助の活動も不可欠と位置づけられた。将来に向けてその役割を全うしていく基盤を発展させていくためにも、改めて「協働」による活動の仕方、公的資金と地域活動の関係性をしっかりと考えて定着させていくことが必要となるだろう。

いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024

目指せ 地域共生社会 ごちゃまぜにつながろう！

11月号で速報をお伝えした当財団主催「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」。

今月号は、学ぼう編から「居場所」と「近隣助け合い」、語ろう編の3本、そして参加者の皆様のご意見・ご感想を報告いたします。

(文責・編集部)

学ぼう編

「共生型常設型居場所の広げ方」

進行役 鶴山 芳子

さわやか福祉財団常務理事
共生社会推進リーダー

登壇者 河田 珪子氏

地域の茶の間創設者 (新潟県新潟市)

吉野 義道氏

砂町よっちゃん家代表 (東京都江東区)

今野 智子氏

みんなの居場所からハウス代表
(静岡県藤枝市)

冒頭、進行役の鶴山から「地域共生社会に向けて、

さまざまな人たちがつながること、それが広がること

で解決できることがあるのではないか。そのために誰でも気軽にに行ける居場所が欲しいという住民の声がある。ではどうやって居場所をつくれればいいか、居場所でみんな一緒に過ごすことでどんな効果があるかを考えてい」と提起した。

今野氏は、誰とも話さず引きこもりがちになっていく高齢者などに何とか外に出てきてもらいたい、居場所ですぐに過ごし、仲良くなる中で心配事があればお互い助け合う関係をつくりたいと、2015年に空き家となっていた実家で居場所「かいらハウス」をオープン。出会い・つながり、社会参加、和み、いきがい、

子どもの居場所、の5つを目的として掲げ活動している。その中で、参加者同士の何気ない会話から悩み事が見え、「人や社会との関わりからどんどん遠ざかっていく人に何とか寄り添いたいと思い、そういう人たちが無料でかいらハウスを利用してもらえるように『ちよこつと募金』を始めたところ、地域の実情に心を動かされ賛同してくれる人たちが出てきた」と報告。「行政ばかりに頼るのでなく、身近にいる人たちが支え合おう」と周囲に呼びかけたところ、賛同者が出てきた。「参加者だけでなくスタッフにとっても居場所であり、みんなでつくり上げている。自分たちの地域だからこそ、自分たちの手で助け合いを広げていきたい」と語った。

吉野氏は、実家の空き家を活用して居場所「砂町よつちゃんち」を2017年に開所。その後、コロナ禍となり活動を断念することも考えたが、「困っている人が増えているときだからこそ」との思いをスタッフと共有し、子ども食堂を、購入したお弁当の配布へ変更して活動を継続した。その後再開した居場所には、子どもや若い母親もたくさん来所することから、田舎に来たような懐かしさのある居場所です。下町のおじ

いちゃん・おばあちゃんのようなスタッフが話しやすい雰囲気をつくり、困り事を話してもらえるようにしている。「突然悩み事を打ち明けるお母さんもおり、お弁当配布や子ども食堂を続けてきた成果ではないかと思う」と話した。今では、高齢者のミニデイや子どもへの無料の学習支援等も実施しながら、乳幼児から高齢者までみんながごちゃまぜで楽しんでいる。「居場所運営には労力も必要だが、スタッフ皆、非常にやりがいを感じている。孤立をなくすためには、居場所は必要な場所」と語った。

河田氏は、今では新潟県内に広がっている居場所



「地域の茶の間」を立ち上げるまでの経緯や、行政からの依頼で2014年に立ち上げ、この10月に終了した「実家の茶の間・紫竹」の取り組みを発表。35年前に義父母の介護のために移り住んだ新潟に住民の助け合いがなかったため、自身で生活支援をしたり、してもらったりする中で、「『誰かと会いたい、一緒に食事があったい』という思いが叶えられる居場所をつくりたいと思った」と話した。困り事を抱える中で「助けて」と言うことは大変勇気があることだが、それを言える関係性をつくるための居場所であること、大事にしているのは参加者一人ひとりの「自己決定」と「自己実現」であること。そのために茶の間で行っているさまざまな工夫も紹介。「人間は、誰かが困っていれば何とかしたいという思いが湧き出てくると思う。それが助け合いになり、自分のいきがいにつながっていく。居場所の効果はそういうところにあるのではないか」と語った。

最後に鶴山が、「まずは、ごちゃまぜの居場所に行ってみることが居場所を広げる近道だと思う。地域共生社会の実現のために、ぜひ訪れてみてください」と締めくくった。

「近隣助け合いの広げ方」

進行役 高橋 良太氏

社会福祉法人
全国社会福祉協議会地域福祉部長
全国ボランティア・
市民活動振興センター長

登壇者 荒木 浩子氏

川越市第11地区社会福祉協議会会長
川越市新宿町五丁目自治会会長
(埼玉県川越市)

安田 順子氏

いいね！大羽根地域まごころサポート
代表 (三重県菰野町)

岩崎 正朔氏

川西地区自主防災会会長
(香川県丸亀市)

冒頭、進行役の高橋氏が「能登半島地震などから、発災後にまず大事なものは隣近所による支援だと分かっていることが災害時にも重要。さまざまな人が暮らす地域で、何をきっかけに近隣住民同士の活動が始まったのか、課題や困難をどう乗り越えているかについてお聞きしたい」と話した。

荒木氏は、自治会加入率約86%と高い新宿町五丁目自治会の活動を報告。同自治会は、「誰もが安心して活き活きと自立した暮らしを続ける、「ふれあい」「安

心」「助け合い」の3つがある地域を目指し多彩な活動を広げている。助け合いの活動としては、コロナ禍の2022年、自治会の中に思いやりと助け合いの会「ごようかい」を立ち上げた。自分や身内にできないことをお互いさまの気持ちで有償で助け合う仕組みとし、活動には中学生や外国人も参加している。自治会内の組織のため、運営費の心配がなく全世代を対象にでき、自治会員の安心感が増すというメリットもあると説明。また、「コロナ禍はマイナス面もあったが、危機的状况の中で、大切なものや必要なものが明確に示された」といい、感染予防をしながら防犯パトロールやふれあいのための芋掘り大会等、新しい活動を立ち上げた。最後に、「先人が積み上げてきたことを生かし、新しい課題に挑戦して、できることを持ち寄り無理なく続けることが大切」と語った。

岩崎氏は、1995年にスタートした「地区コミュニティ組織」の活性化として防災活動を提案。地域のさまざまな住民のもとに足を運んで呼びかけ、賛同者を増やして、先進地への視察や交流を通じて30名ほどの自主防災会を立ち上げた。街路灯の整備や家庭訪問等の活動を進める中で、困り事を抱える家庭への見舞

金制度を設立。また、「企業連携による災害対応力向上」をテーマとして、倉庫に災害時の備蓄品を置かせてもらう、学校の倉庫に備蓄品を運び入れる際に企業の若手社員が支援するといった取り組みも進めてきた。さらに5年前からは、高齢者を対象に週3回の移動支援サービスも開始。重たい物を運転者が利用者宅の冷蔵庫まで運ぶこともしており、現在利用者は約70名に上る。今後については「高校生をもっとボランティア活動に巻き込んでいきたい。また、財源確保と同時に、有償ボランティアを織り込んだ活動を展開していくことで長続きさせていきたい



い」と語った。

安田氏が活動する大羽根園地区では一人暮らし高齢者が多くなり、自治会での話し合いや、2007年に行った大学との連携によるアンケート調査とその後の勉強会を経て、高齢者支援をテーマに取り組んできた。安田氏自身は町社協職員だった2000年代、脳梗塞と認知症のある夫を介護しながら「いきいきサロン」を町の各所につくってきたが、全国ボランティアフェスティバルでの新潟市・河田圭子氏との出会いを機に、「地域の茶の間」を訪問。運営方法を教えてもらい、仲間呼びかけて大羽根園の「地域の茶の間」を創設した。週1回、昼食も食べられて、住民同士が気軽に話せる場所となっている。そのような中で、生活の中の困り事を相談されるようになり、有償ボランティアによる生活支援「地域まごころサポート」もスタート。支援で訪問すると、やはり利用者はふれあいを求めていることが分かる。自分で買いたい物、受診時に付き添ってほしいというニーズもあることから、移動支援も行っている。「今後も、地域で楽しくお互いさま、という助け合いができれば」と語った。

以上の発表を受けて高橋氏は、仲間づくりの広げ方

について各登壇者に質問。SNS等も活用しながら情報を住民に伝えること、お祭り等でつながった若い世代を勉強会などに誘って仲間になってもらうこと、活動者皆がリーダーとなり利用者1人に対して数人のグループをつくって活動すること、などの意見を引き出し、「一人だけでなく、いろいろな方々に『助けて』と言うことが大事ではないか」とまとめた。

語ろう編

「語ろう編」はライブ配信のみで応用編の位置付けとし、オンラインで参加者との双方向の議論を行った。

「生活支援コーディネーターと協議体はどう働きかけたらよいか」

進行役 鶴山 芳子

さわやか福祉財団常務理事
共生社会推進リーダー

登壇者 岩名 礼介氏

三菱UFJリサーチ&コンサルティング
株式会社 社会政策部、主席研究員

戸澤 真澄氏

大館市第1層SC（秋田県大館市）

西村 武士氏

長崎県福祉保健部長寿社会課
地域包括ケア推進班課長補佐

生活支援体制整備事業10年目、この間人口減少が進み地域のつながりは希薄になった。総合事業のガイドラインも改正される中、登壇者や参加者と議論した。

戸澤氏は、住民主体の体制を推進してきたが、人口減少による地域課題に対し多様な組織や住民50人でワークショップを行い、プロジェクト化している取り組みと他事業との連携を紹介した。西村氏は、「助け合い活動強化事業」として県内市町村で実施したSC情報交換会、アドバイザー派遣事業の成果と課題、市町村へのきめ細かなヒアリングを報告。岩名氏からは、主に総合事業のガイドライン改正と地域支援事業実施要項等の改正について説明された。

後半は、事前に実施した参加者アンケートを基に「やらされ感の払拭」「協議体のつくり方・進め方」「担い手不足への対応」「都道府県の支援」「地域共生社会に向けた事業連携」の5つのテーマを設定。「地域に入り住民と向き合う方法」「住民の思いを聞き出す方法は？」等々についての地域の具体的な質問を、参加者であるSCや協議体、自治体職員などが発言。登壇者や参加者から住民主体の地域づくりを推進するさまざまな方法や考え方が示された。

最後に鶴山から「人と人とのつながりを、世代を超えて広げていくことがSCの重要な役割ではないか。

行政などいろいろな人たちと一緒に地域をデザインしていけるように、今回の情報を参考にさせていただいた」とメッセージを発信した。

「居場所と有償ボランティアをどう広げたらよいか」

進行役 鶴山 芳子

さわやか福祉財団常務理事
共生社会推進リーダー

登壇者 河崎 民子氏

NPO法人
全国移動サービスネットワーク
副理事長

稲葉 ゆり子氏

たすけあい遠州代表（静岡県袋井市）

渡邊 典子氏

ほっとあい副理事長（宮城県大河原町）

地域の「移動支援はニーズが高いが始めるのは不安」「家の外での活動は行っているが、家の中に入る有償の生活支援まで進まない」「居場所に認知症の人が来た場合の対応に悩む」等の声に、登壇者がサービスでない「助け合いの基本」による手法を提供した。

稲葉氏は、これまで広げてきた居場所や助け合い活

動について報告。「居場所こそ人と人がつながり、助け合いが創出され、参加者の成長にもなる」「SCの皆さんは、誰が参加してもいい機会を何度もつくり

『これからどうしたい?』と住民に投げかけてほしい」と呼びかけた。渡邊氏は、住民同士の話し合いから始

めた「ほっとあい」の有償(あるいは無償)のボランティアによる生活支援サービスや居場所について報告。

「信頼・感謝・交流が活動の一番の基本だと思う」と話した。河崎氏は「つながる&支え合う地域づくり」

「住民互助の移動支援活動 事例」「有償ボランティアを促進する制度改正」をポイントに移動支援についての説明。「公共交通の補完でなく、つながりづくりのための住民活動であることを基本的に行政も支援してほしい」と強調した。

後半は、「行ってみたい居場所」「居場所を創出する上で最も悩んでいること」「有償ボランティア団体に地域住民が頼んでみたいこと」「有償ボランティアを創出する上で最も悩んでいること」「移動支援を創出する上で最も悩み・関心」の具体的な質問5つを設定し、参加者がライブ投票。投票数の多い質問から順に登壇者が回答し、ノウハウを共有した。

「つながりづくりの進め方」

進行役 清水 肇子 さわやか福祉財団理事長

登壇者 新田 國夫氏 一般社団法人
日本在宅ケアアライアンス理事長

貝長 誉之氏 社会福祉法人太子町社会福祉協議会
事務局次長 兼 地域包括推進室長

(大阪府太子町)

中村 保佑氏 東灘こどもカフェ代表、労働者協同組合
甲南げんき村代表理事(兵庫県神戸市)

江田 佳子氏 佐々町多世代包括支援センター 参事
(長崎県佐々町)

地域共生社会に向けて、ごちゃまぜにつながるごとの必要性について議論した。貝長氏は、太子町の生活支援体制整備事業や大阪府のSC情報交換会について報告。江田氏は、佐々町の多世代包括支援センター創設や共生型居場所「元気カフェ・ぷらっと」、共生社会に向けて昨年立ち上げた「高齢・障がい地域支援会議」の取り組み等を報告した。中村氏は、居場所「東灘こどもカフェ」と、各分野の13団体が集まって地域課題に取り組む「甲南げんき村」について紹介した。在宅医療に長年取り組んできた新田氏は、「患者

参加者アンケートから

参加者の皆様からたくさんお寄せいただいたアンケートのご意見・ご感想を一部ご紹介します。
(カッコ内は所属または肩書)

◆病気の人や障がいの有無、年齢にかかわらず、どの人も助けてもらえばかりでなく他者の役に立つことで元気になるという話に納得・共感した(中間支援NPO) ◆自分たちが生きているこの時代を知り、何が問題で今後何に取り組まなくてはいけないか考えさせられた(地域包括支援センター) ◆丹野智文さんの当事者の声、自分もハッとさせられることが多かった。何もできない人ではないことなどを念頭に関わっていきたい ◆「助けられ上手」になることを集いの場の代表者に投げかけていきたい(第2層SC) ◆住民さんたちのやりたいことや知りたいことを中心に進めていくことが大事だと思った(地域包括支援センター・認知症地域支援推進員) ◆有償ボランティアのプログラムでのお話。ニーズ把握や行動の早さ、困っている人をほっとけないという優しさを尊敬する(SC、元ケアマネジャー) ◆スローショッピングを構想している。今後のチームオレンジの活動等に参考になることがとても多い(認知症地域支援推進員) ◆地域にどんどん入って地域を知りたいと思った(SC) ◆ボランティア活動とケアマネジャーがうまくつながることが大切。現状あまりないこと ◆「語ろう編」の参加方法が楽しかった

本人が最善と思える生活・人生を目指すことが在宅医療提供の重要なポイント」と述べた。また、日本在宅ケアアライアンスや、地元東京都国立市で認知症の人などの役割・居場所づくりとして開催している「くちちゃん食堂」を紹介した。

なお、このプログラムは参加者から登壇者への質問をライブで受け付けながら進行され、「活動メンバーの高齢化と若い世代との協働」「多世代が集まるサロ

ンへの参加の促進」「居場所を毎日開催する秘訣」等の質問に登壇者が答えた。

最後に、参加者から寄せられた意見・質問の中で多かった言葉を多いものから大きく画面で表示。「つながり」というキーワードが最も大きく表示された。これを受けて進行役の清水が「それぞれの地域で皆さんがつながり、考えていく先に地域づくりがあるのでないか」とメッセージを発信し、終了した。



支え合い、心をつなぐための地域づくり

NPO法人福祉亭 (東京都多摩市)

高齢化が急激に進む大型団地で、23年前から居場所づくりに取り組み、支え合いの輪を広げてきた「NPO法人福祉亭」。多彩な人々がごく自然に関わって、住民の安心といきいきとした暮らしをサポートしています。(取材・文/境 朗子)

コミュニティ再生を目指して

扉を開けると、心地良いジャズのメロディーとほのかなコーヒートの香りに包まれる。東京郊外の多摩ニュータウン、UR永山団地内の商店街の一角に、

20年以上前から変わることなく団地や近隣の住民を迎え入れてきた地域の居場所「福祉亭」。午前10時からの喫茶

タイムでは飲み物や軽食が提供され、お昼時になるとお待ちかねの日替わりワンコイン(500円)ランチが始まる。お弁当も用意され、近隣住民が受け取りに来るだけでなく、見守りを兼ねて自宅への配達も行う。

取材日のメニューは、ブリの照り焼きとカボチャのサラダ、ほうれん草のシラス和え、きんぴら、モヤシのナム

ルの5品にお味噌汁とご飯。おいしそうに箸を進める女性(60代)は

「品数が多くて栄養満点。しかもおいしい。今日も完食です。心も体も満たされますね」と話す。自宅は永山団地だが、夫が倒れて在宅介護が始まると、





公園で遊ぶ子どもたちも気軽に立ち寄る福祉亭

き、たまたま福祉亭を見つけて思い切
って入ってみました、スタッフの方が親
切に声をかけてくれました。10年ぶり
に外食ができました！と晴れやかな
表情を見せる。それからときどき福祉
亭に来ては、テーブルの花やランチを
スマホで撮影し、SNSで発信する楽
しみを覚えた。今、福祉亭での食事は
この女性にとって最高の「ハレの日」
であり、世の中とつながる窓になっ
ている。

多摩ニュータウンは、高度成長期に

友だちと会う
ことも、大好
きな映画を見
に行くことも
なく閉じこも
っていたとい
う。だがある
日、「夫がデ
イサービスに
行っていると

整備された国内最大規模の集合住宅街。
1971年、最初に入居が始まったの
が諏訪・永山地区の団地で、若いファ
ミリー層が一斉に移り住んだ。しかし、
時を経て居住者の高齢化は進むばかり。
団塊の世代が定年を迎えるいわゆる
「2007年問題」など、課題は山積
みになっていた。

「何とかしなければ——」。そんな問
題意識を早い時期から持った永山団地
住民の一人が、現在の福祉亭副理事長
で当財団のさわやかインストラクター



福祉亭ではさまざまなイベントも

でもある寺田美
恵子さん（77歳）
だった。

「多摩市高齢福
祉課が高齢者社
会参加拡大事業
懇談会を開催し、
それに参加した

市民の中から福
祉亭の構想が生
まれました。コ
ミュニティの再

生を目指し、当
時までそれほど
世の中に知られ
ていなかった高
齢者の居場所を
つくろうと取り
組んだのです」
東京都の補助
金でシャッター
商店街の空き店



品数も多い
日替わり
ランチ



舗を改装し、福祉亭は02年1月に活動をスタート。市民ボランティアによる運営で、都の「高齢者いきいきミニデイ」の補助も活用しながら活動を続けている。

多彩な人々が交差する場所 お昼の福祉亭

福祉亭の発足時から柱をなす活動が、栄養バランスが整った前出の日替わりランチ。高齢者の心身の健康を守りながら、『ちよいボラ』として、買い物に行ったり、お金を下ろしたり、ランチをお弁当にして届けるなど、暮らしの中のちょっとした困り事にも対応している。謝金は、活動内容によって受け取る場合もあれば、受け取らない場合もある。お互いの気持ちや状況によって柔軟に対応する姿勢は、行政等とは異なる市民による活動ならではのう。

地域で暮らす各分野の専門家たちも

仲間として協力。手芸、カラオケ、アロマ、唱歌など、日々楽しいイベントが待っている。福祉亭のボランティアスタッフは40名ほど。1日10000円の謝金が支給される人、多摩市のボランティアポイントを活用する人、また全く無償を望む人もいるという。

6〜7年前、福祉亭のカラオケの日に歌を歌っていて「盛り上げ上手だ」とスカウトされたのは斉藤泰正さん（82歳）。福祉亭のバリスタを引き受けることになったが、「最初はコーヒーがぬるかったりしてうまくいかずシオンポリしていたら、ある日、一人のお客さんが

『あなたのコーヒーには愛情が感じられる』と言って、一気



交換留学生のマリオンさん



職場体験で訪れていた中学生

に調子に乗りましてね。自分なりに淹れ方を研究するようになりました」と楽しげに語る。新たな能力とやる気を引っぱり出してくれたのは、福祉亭利用者の『愛情』だった。

取材した日、厨房ではフランス人のマリオンさん（31歳）が調理スタッフとしてテキパキと小鉢に盛りつけをしていた。独立行政法人日本学術振興会の交換留学生として来日し、公共住宅に暮らす高齢者の実態調査を行っているという。福祉亭と以前から交流のあった大学教員の紹介で、今年5月から

週2回ほどボランティアとして参加している。

「長い年月をかけて積み上げてきた福祉亭のプロジェクトはユニーク。80代から若い世代までボランティアが共に地域にうまく溶け込んでいます。これからも続いていくでしょうね」と話す。周りのスタッフに「日本語がうまくなつたわね」と言われてマリオンさんはうれしそうだ。

近くの中学校から3日間の職場体験学習でボランティア参加していた2年生にも感想を聞くと、厨房で丁寧に食器を洗いながら「意外に楽しいです」と素敵な笑顔で話してくれた。家で母親に洗い方のコツを教わってきたそうで、スタッフたちも「上手ね。ありがとう」と声をかけながら応援している。休憩時間には友だちが福祉亭の様子を見にやって来て、何やら楽しげにおしゃべりも。福祉亭は、寺田さんたちが当初描いていた「高齢者」だけでなく、

多彩な人々が世代を超えて集まりにぎわう場所となっていた。

宮崎兆子ちようこさん（90歳）は「福祉亭に立ち寄ったら忙しそうだったので、ちよつと手伝つたら『また来てくださいよ』と言われて、そのままボランティアに参加するようになった。でも洗つたり切つたり焼いたり、下準備をするのは楽しくて。7年か8年、85歳まで続けて、今は利用者としてと



踊りが趣味だった利用者に着物を贈られて大喜びのマリオンさん

きどき食べに来ています」と話す。顔なじみになったマリオンさんと身振り手振りでの会話を楽しんでいるうちに着物の話題となり、「もう着なくなつた着物があるから差し上げましょうか」と言つたら大喜び。マリオンさんの家族が来日する際、福祉亭で紹介してもらう約束もした。きつと居合わせた利用者もおしゃべりの輪に入り、その後、異文化交流の楽しさをまわりの人たちに伝えたくなることだろう。多彩な人々が交差する福祉亭という居場所では、特別な仕掛けをしなくても自然にさまざまな交流が広がっていることが分かる。

民生委員で、地域の集会所で体操サロンを開いているという森脇泉子みづこさん（74歳）。ちよつと予約したお弁当を受け取りに来たときに団地の現状を聞いてみると、「80代・90代の高齢になつて、遠方からこちらの団地に引越して来られる方も結構多いです」との



福祉亭スタッフの皆さん。前列左から、岡田米子さん、元山さん、山本さん。後列左から庄子さん、歌川榮子さん、寺田さん、新井こずえさん、斉藤さん

こと。長年住んでいた自宅が建て替え等で転居せざるを得なくなつた場合、一人暮らしの高齢者はなかなか部屋を借りられないのが実状だ。でもUR賃貸住宅なら年齢に関係なく入居が可能だ。また、都心に暮らす子どもとの近居を求めて暮らし始める高齢者もいるという。晩年になり、地縁のない土地に一人暮らしするのはどんなに心細いこと

か。でも「福祉亭につながつたことで、『友だちができた』と喜ばれるんです」と森脇さん。「1日のメインの食事を福祉亭のランチにして、栄養を含めて生活のバランスを取っている方もいらつしやいますね」

週3回ほど福祉亭にランチを食べに来るといふ女性（63歳）は、「夫は40代で亡くなり、自分もがんを患つて食事の大切さを痛感しました。ここでは、知恵袋のような80過ぎの常連さんについていろいろな教えてもらつています。ランチを食べていると『よし、今度自分でこれを作ってみよう』という意欲が湧いてくるんですよ」と顔をほころばせた。

どうぞ気軽に扉を開けて

福祉亭の発足当時からボランティアとして参加している山本節子さん（80歳）は「以前、保育園に勤めていてお料理が大好き。ちよつとでも『おいし

かつた』と言われるとうれしくて、いつの間にか活動も長くなりましたね」といい笑顔だ。調理のメンバーは曜日ごとに替わる4〜6人ほどで編成され、ベテラン料理人から若手、民生委員、障がい者の作業所利用者など多様な人たちが心を込めて腕を振るう。持ち味の違ひも、利用者にとつては楽しみの一つ。たとえ何か小さな失敗があつたとしても、それを含めて愛おしくなる『家庭料理』なのだ。

週1回、福祉亭でスマホカフェを開いている庄子元さん（73歳）は「スマホカフェは、スマホの使い方を習得するためだけではありません。例えば『子どもは忙しいので操作方法を教えてもらうのを遠慮している』とか、スマホを通して家族や友人とのつながりなど人間関係を語るきっかけになる『語り場』なんです」と強調する。福祉亭のさまざまなイベントも人と人をつなぐ大事な役割があり、参加者が自

身を振り返りつつ表現できる大切な場なのだ。庄子さんは、今年5月から福祉亭の理事長に就任。「福祉亭の存在

価値を日々あらためて感じています。

変化していく時代に対応できるように、常に新しいことを考えながら活動していききたい。10年、20年後に花開くボランティア予備軍が目の前で育っていくのを見守るのは楽しい」と意気込みを語る。

22年、福祉亭では子ども食堂を開始。毎回、利用者はもちろんボランティアも多世代が大勢参加し、ワイワイガヤガヤ大にぎわいだとか。元理事長の元山隆さん（89歳）は、「ボランティア」という考え方が若い世代に馴染んできているのを実感しています。時間はかかるけれど、私たちが目指す地域はもう少し先に確実にあると思う」と力強く話した。

多摩市の生活支援体制整備事業等で福祉亭とも活動を共にしている第1層

生活支援コーディネーターの木下公大さんは、その存在の大きさを実感してきた。

「福祉亭は住民の方々の命の糧と云っても過言ではありません」。事業についても「寺田さんたちは第1層協議体のメンバーではあるけれど、現場で活動する第3層的な役割も地道に続けていらっしゃいます」と話す。

寺田さんは「よその地域から福祉亭のような活動の支援をしてほしい、とお声かけをいただいたこともあり。でも、地域ごとに全くあり方が異なりますから、それぞれ住民さんが思いを込めて活動を立ち上げ、支え合う地域をつくるのが大事かなと思います」と考えを語った。そして最後に「福祉亭でさまざまな方と出会い、どの方も一人の旅人として人生の時間

を歩まれていることが分かります。支え合う姿、心だけはどこかでつながれるような、市民による地域づくりをこれから目指していきたい。どうぞ気軽に扉を開けてください」と愛情あふれるメッセージを寄せてくれた。

NPO法人福祉亭

2002年から地域住民を対象に居場所を提供。昼食の提供を柱に、生活支援、地域情報の発信、世代間交流、趣味を通じた交流、絆づくりなどを行う。高齢者を含め多世代が暮らしやすい地域づくりを続けている。

- 連絡先 206-0025 東京都多摩市永山4-2-3-104
- 電話 042-374-3201
- メール fukusitei@bz01.plala.or.jp
- ホームページ <http://www.fukushitei.org>
- 10～17時 開所
- 原則、日曜祝日・夏季休暇期間・年末年始は休業

いいきいき わくわく

子どもと一緒に 地域で輝こう



ひとりぼっちをつくらない ごちゃまぜの居場所

みんなのいえカラフル（大分県竹田市）

築100年以上の古民家で、乳幼児も高齢者もさまざまな個性を持つ人たちも、みんなが集う居場所「みんなのいえカラフル」。「ひとりぼっちをつくらない地域・社会」をコンセプトに活動する皆さんを取材しました。

（取材・文／編集部）

●赤ちゃんから高齢者まで、みんなで過ごす

その古民家は、城下町の風情が漂う商店街「古町通り」にある。ここで週3日、地域の人々に開放されているのが「みんなのいえカラフル」（以下、カラフル）だ。1年間の来所者は延べ4000人ほど。乳児から100歳以上の人まで誰もが

気軽にやって来て、小学生以下

無料、中高生1000円、それ以上の人は3000円で昼食も食べられる。

運営しているのはNPO法人Te^テto^トComp^{コン}any。2018年にカラフルをスタートし、20年から未就学児を対象とする児童発達支援と、小



「みんなのいえカラフル」外観。
入り口に掛けられたのれんも風情を醸し出している

学1年生から高校3年生までの障がいがある子どもや発達に特性がある子どもを対象とする放課後等デイサービスも始め、現在は34人の児童生徒が登録し、1日10人ほどが通っている。「アソビバTeeto」（以下、アソビバ）と名付けられたこの2つの通所サービスは日曜日以外毎日行われ、居場所であるカラフルは火・木・土曜日の10〜14時。ひとつ屋根の下でみんな一緒に過ごす。個別の対応が必要な子や刺激に弱い子は火・木は別室で過ごす、土曜日は朝から地域の人たちと同じ部屋で交流している。

● ママも子どもも、高齢者もうれしい！

取材した日にカラフルに来ていたのは、地域の大人13人、子ども6人、アソビバの利用者8人、スタッフ5



赤ちゃんがそばにいれば、高齢者も思わず笑顔に

人。赤ちゃんもいて、日によっては年齢差が100歳を超えるという。

1階の大きな食卓には、高齢者を中心に地域の人たちが集い、会話が花が咲いている。その輪の中にいたYさん（20歳）は、15〜18歳までの4年間アソビバに利用者として通っていた。卒業した今も「地域の人と話せるから」とカラフルに通っている。高野将さん（80歳）は地元でタクシー会社を営んでおり、カラフルの常連さんだ。「食事をみんなで作って食べるのが楽しい。ここに来る人は



大きなテーブルを囲み、お茶しながら交流



キッズスペースにはいろいろなおもちゃが

自分でできることは何でもやって、困っていることがあれば手を貸し合っています。商店街にこんな良い居場所ができてよかったです」
2階のキッズスペースにいた菅あすかさん（40歳）は、3か月と3歳の2人の子どもを連れてお昼を食べに来た。「今日は夫が出勤日です。1人だと大変ですが、ここなら子どもが泣いても皆さんが相手をして



みんな一緒なら、小さな子の親もひとときゆっくりと食事ができる

くれます。知育系のおもちゃがたくさんあって長女もお気に入りです」と話してくれた。この日も地域の人たちが赤ちゃんを抱っこしている間にお昼を食べ、「久しぶりにゆっくりご飯が食べられました」とホッとした様子だ。

●知らないから不安になる

アソビバの利用者Aさん（中3）とBさん（高1）は1階のソファで、友だちとスタッフがトランプをするのを見ていた。時折、昼食を食べに来た地域の高齢者とも会話を交わしている。「家みたいに安心していられる場所」「仲の良い他校の友だちもいて、過ごしやすい」とカラフルの感想を語ってくれた。

この管理者、児玉記子^{のりこ}さんは、立ち上げ時からのスタッフだ。現在、常勤スタッフ8人、大学生を含む非常勤スタッフ17人と一緒に運営を支えている。常勤スタッフは保育士、特別支援学校教員経験者などで、

個性ある子どもたちを支援している。

「この魅力を一言で言うと『ごちゃまぜ』。みんなが集まる場なのでいろいろなことが起きますが、それは当たり前。人と人が理解し合えるこういう場所がもっと増えたらいいなと思います」



管理者の児玉さん

テトカンパニー理事長の奥結香さん（37歳）は愛知県生まれの大分市育ち。専門学校卒業後、介護福祉士として重度障がい児の施設で働いていた20歳のとき、差別や偏見がある社会に疑問を持った。

「社会はまだまだ、施設を分けて障がいがある人や認知症の人などみんなの接点がなくなる仕組みになっていきます。知らないから不安になるし、差別や偏見も生まれてしまう。そういう現状を変えられたらと思います」

10年ほどは「修業」をしようと決めた奥さんは、

通信教育で教員免許を取り、特別支援学校の教員などを経て、JICAの海外協力隊員としてマレーシアで2年間、障がい児支援に携わった。

● 理解し合える仕組みが必要

さまざまな経験を通して奥さんが感じたのは、「学校も施設も、一生懸命やっている」ということだった。だからこそ、やはり「分ける」のではなく、立場や年齢、障がいの有無等に関係なく集える場をつくり、お互いを理解し合える仕組みづくりが必要なのだった。

ちようどその時期、竹田市が地域おこし協力隊員を募集していた。奥さんは、自分の思い描く地域をつくりたいと「企画提案部門」に応募して採用され、17年10月から竹田市に住み始めた。その半年後、運命的な出会いが訪れた。

自身のプロフィールと竹田で始めたいことを書いたチラシを配っていた奥さんが出会ったのは、自宅を開放して障がいの者のデイサービスよしのを運営していた経験を持つ川口芳之さん（88歳）だった。



今年10月には、カラフル6周年と川口さんの米寿をみんなで祝う会が開かれた。左が奥さん、右が川口さん

「奥さんの話を聞いて、同じことを考えている人がいるのだと驚きました。そこで、私が所有していたこの

古民家を改修

して、居場所として提供することにしたのです」

と川口さん。運営が軌道に乗るまでの5年間、家賃は無料にし、カラフル開所から6年が経った今、この家はテトカンパニーに譲ったそうだ。

●居場所の中にみんなを包み込む

福祉施設を居場所として活用するのではなく、福祉制度も活用しながら居場所の中にみんなを包摂するのがカラフルのスタイルだ。困り事を抱える人たちを制度に任せきりにしてしまえば、それに縛られて自分らしい生活を送ることは難しくなる。

地域の人同士がつながり支え合うことが、将来、子どもたち世代が安心して暮らせる地域の土台にもなるだろう。

「皆さんのおかげで、思っていた以上に良い場所になりました。どうすれば誰もが生きやすくなるかな、とみんなで話し合いながらやっています」と奥さんは充実した表情だ。

* * *

昨年、テトカンパニーはカラフルと別の場所に築60年の一軒家を購入し、みんなで改修した。地名の荻町恵良原^{えらはら}と、地域の中に入りプラスの貢献をしたいという思いをかけ合わせて「Haru^{ハル}＋」と名付けたその居場所は、今年4月にオープン。誰でも気軽に行ける2か所目のごちゃまぜの居場所を目指しながら、共生型デイサービスも運営している。

地域には、当たり前前に子どもも高齢者もさまざまな個性の持ち主も、困っている人もいる。顔見知りになり、みんなが安心して共生できれば素晴らしい。

地域の力で子どもたちの共感力を育てる、
そしてシニアも元気になる

「ともあそび」を始めませんか？

子どもたちが、幼い頃から地域のいろいろな人と「あそび」を通じて
関わり合う中で、「共感力」を育てていける地域づくりを進めましょう！
子どもと遊ぶことで、シニアも地域もエネルギーをもらい元気になれます。みんなで子どもたちを育てる地域づくりに、当財団の「ともあそび」冊子をぜひご活用ください。

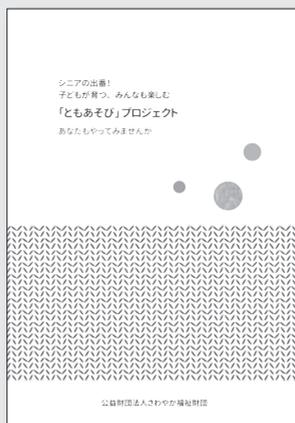


「どう遊ぶ？」 Q&A

ともあそびの準備、遊び方、
関わり方、言葉かけのポイントから、
注意点や保護者との関わりなどを
Q&A方式で分かりやすく解説しています。

地域シニアが 子どもたちと共に遊ぶ ともあそびへの おさそい

ともあそびの種類や始め
方などを紹介しています。



シニアの出番！ 子どもが育つ、 みんなも楽しむ 「ともあそび」 プロジェクト あなたもやってみませんか

ともあそびプロジェクトの
提言書です。今、地域で
ともあそびを広げる意義、子
どもたちの成長などについ
て解説しています。

※当財団 HP トップページ→「ライブラリー」→「各種広報ツール」からダウンロードできます。

◎ お問い合わせは当財団まで ◎

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

居場所のつながりを地域へ

「実家の茶の間・紫竹」終了プログラム ④

「地域の宝になる」――最終日の茶の間で――

10月30日（水）、実家の茶の間・紫竹は最後の日を迎えた。特別なセレモニーはなく、いつも通りの朝。

30人ほどのお当番さんは午前8時過ぎには集まり準備を始めていた。9時、お当番さんのミーティング。いつものように「新型コロナウイルス感染症防止を踏まえた『実家の茶の間・紫竹』」を読み上げ、みんな確認し合う。28日（月）には新潟市の井崎規之副市长も訪問されるなど、多くの人が集ったそう。この日は当財団の清水肇子理事長も駆けつけ、河田珪子さんや参加者の皆さんと交流した。昼食のカレーが足りなくなり追加分を作るなど慌ただしい中にもにぎやかな一日となり、最終日は何人参加するか分からないが「来られる人たちの安心感、喜びを自分たちの喜びに感じろ」、そんな場所にしていくと共有されていた。

さわやか福祉財団常務理事
共生社会推進リーダー

鶴山 芳子

玄関先には青い模造紙に大きな文字で「10年間大変お世話になりました」と張り出され、きれいな花々と共に来る人たちを迎えている。また床の間の黒板には「本日が最後の茶の間になりました 10年間ありがとうございました」と大きな文字で書かれていた。本当に最後の日となった。10時頃、「おはようござい



河田珪子さん（写真中央）。
参加者の皆さんといつも通り和気あいあい



玄関先にも「10年間大変お世話になりました」の張り紙が

ます。これまで本当にありがとう」「ありがとうござ
いました。今日までですね」などの声が聞こえ、だん
だんにぎわってくる。集う人同士が笑顔で交わす「あ
りがとう」で、茶の間は温かい雰囲気にもまれていた。

◆「自己決定」を推進する場

終了プログラムの最後に「終了せしモノ、イベン
トは行わず、9回すべての日を最後の日と位置付ける。
理由は、地域の茶の間（個人の茶の間ではなく、社会
性のある茶の間）の、そもその目的である「助けて
!!」と言える自分をつくる。「助けて!!」と言い合え
る地域を創る。みんなお互い様なのだから…と。その
ために人とつながり、社会とつながる機会を提供する
場。小さくなった家族機能、近隣との助け合い機能を
もう一度自分事として考え今後の安心を手にする大切
な日々をしたい。実家の茶の間・紫竹がなくなっても
今後の生活を安心して過ごせるようにしたい。」とあ
る。

これからの地域について『自分事として考え今後の
安心を手にする大切な日々』とは、茶の間がなくなっ
てもそこでつながった人たちとつながりながら、受け

身ではなく意志を持ち自分で選択し決定しながら主体
的に暮らしていくことではないか。例えば、茶
の間の壁に張り出されている視察や訪問者の予定。

「○月◎日 保健師、○月△日 作業療法士、◇日は
行政相談員が来訪されるなど専門職の来訪」「県内や
県外からの視察者来訪」「□□小学校の総合学習での
来訪」「カレーの日」などさまざまなお知らせが張り
出されており、来ている皆さんは自分で来たい日を決
めて参加していたという。また、コロナが流行してい
たとき、河田さんが「濃厚接触者になってしまった場
合、誰に買い物などを頼みますか？」とたずねる場面
もあった。時折そうつた呼びかけを「自分事」と感
じ、「自分ならどうしよう」と考え判断する機会も重
ねてきたのだろう。多くの人たちは年を重ねるたびに
周りに気を遣い遠慮し、諦めていくことが増えていき
がちではないかと思うが、そのような中で茶の間は
「自己決定」を大事にする場となっていた。

◆1人ひとことスピーチ

11時頃。8人ほどが集い、テーブルごとに自由に過
ごしおしゃべりし、時折大きな笑い声も起こる中、10



手作りマイクを手に、
みんなが思いの丈を話した「1人ひとことスピーチ」

月から始めた参加者全員による「1人ひとことスピーチ」が始まった。料理用ラップの芯に造花を挿した手作りマイクを持って1人1分スピーチ。「名前はフルネームで」との呼びかけでにぎやかに始まった。各自名前を言った後、思いを語り合う。「いろいろな人と知り合いになれてよかった。これをご縁にどこかで

あいさつができればと思います」「ここに来るのが楽しみです。今日で終わると思うとても寂しい。生活のリズムになっただ」「2歳の娘と3回目です。人見知りしていた娘が皆さんのおかげですっかり慣れてきました」「ここに来なければ一人で家にいた。ここに来ると薬がいらなくなるくらい元気になれる場所。弱いところもあったが皆さんのおかげで強くなっ

た。会ったら声をかけてください」「東京で仕事をしていたが馴染めず新潟に戻ってきた。心が折れてしまった。最初は泣いてばかりだったが、2年でこれだけ元気になった。ここは私の恩人」。ときには涙ぐみながら話す姿にジーンとする。

「近くで居場所を始めました。ここに来ていて、気にしてくれる人が地域にいるのがいいと感じた。気にかけるような居場所にしたい」「つまずくことがあったけど、ここで助けられた。認知症になっても失敗できる場所だと思う」「認知症になっても尊厳を持つて生きていける、ここはモデルだと思う。福祉現場に生かしていきたい」「ここに来る前は強がって生きていた。でも、みんなが助け合っている姿を見て、今は困ったときは『助けてください』と口に出せるし、『お互いさまよね』とも言える」

ここで学んだことを生かして居場所を立ち上げた人、福祉の現場で生かす人、地域で助け合って生きていく自信が持てた人などさまざま。参加しているすべての人たちにとって、茶の間が大切な場所になっている。「地域の宝になる」とはこういうことだと実感した。

それは「お世話になる場」でなく、それぞれが主体的に関わり、自分らしく居られる場。そして、困ったときには助け合える関係性が育まれた場。この場を通じてみんなできつてきたから、発言の真ん中に茶の間があり、大切なものや関係を生み出した場所になった。すべての人が想いをいきいきと語り合う姿は圧巻だった。「最初は小さな声で話す方、名字だけの方もいました。人の発言を聞き自分の考えも整理したりと、回を重ねていくうちに、次第にそれぞれが自信を持って発言されるようになりました」と河田さん。茶の間でつながった関係や培った力をこれから生かしていくという前向きな発言は、心に響き共感し合った。

◆住民と行政との協働

全員のひとことが終わると、皆さんから河田さんへのリクエスト。河田さんは、ここにいらっしやらない方、駐車場の便宜を図ってくれたご近所の方、賛助会員の方をはじめすべての方々へ「ここで皆さんと過ごせたこと、この10年は私の一生の思い出です。本当にありがとうございました」と笑顔で感謝を語った。

委託ではなく協働での10年間について、この日も訪

れていた篠田昭前新潟市長（現学校法人新潟青陵学園理事長）は、「その効果は大きかったようだ。行政の役割、住民の想いと役割がある。補助金などに頼るのではなく、広く共感の想いを集め、『お互いさま』『役に立ってうれしい。ありがとう』の気持ちも育ったからこそ、新潟での取り組みは10年続き、大きな実を付けたのではないか」と話していた。

◆新たな茶の間で会いましょう

12月15日（日）、同市東区の石山地区公民館で「地域の茶の間 in 石山」が始まる。月1回、第3日曜日に開催していくという。「みんな、また会えますね」と河田さん。集う皆さんの表情が明るいのはそういうことだった。すでに100人ほどの人たちが参加したいと名を連ねているとのこと。ほかに「おでん」

「虹」「地域の茶の間・紫竹」等の居場所が始まるそうだ。「そこにいつもいることを大切にして、毎回皆さんとお会いしたいと思います」と河田さん。100人の人たちは立場も年齢も地域もいろいろだという。新たな場所、さまざまな人たちで、どんな居場所になっていくのかこれからも注目していきたい。

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」 助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、フードパントリーと子ども食堂、畑の活動、居場所の活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

埼玉県桶川市

ボランティアも活動範囲も広がる フードパントリーと子ども食堂

子育て応援 桶川かのうの森

助成金額 14万5000円

「子育て応援 桶川かのうの森」は2021年に設立し、桶川市在住の一人親家庭、困窮家庭等にフードパントリー

事業を実施。また、団体の畑や支援先の近隣農家の野菜をメニューに加えた子ども食堂を2か月に1回開催したり、子どもたちに種まきから収穫と一緒に料理をして



子ども食堂ボランティアスタッフの皆さんと食堂の料理

食べてもらう食育活動を行うなど、地域で暮らす子どもたちが安心・安全に育つための居場所づくりに励んでいます。今回の助成金では、子ども食堂の食材購入や、寄付されたお米を害虫等から守る保存庫を購入することで、フードパントリーや子ども食堂の開催日まで安全にお米を保管することができるようになったそうです。

新しい取り組みとして、社会福祉協議会の調理室を借り、世代間交流を目的とした無料カフェを週に1回開催。カフェに来る人たちに活動を知ってもらうこともでき、カフェや食堂のボランティアが増えました。友だちを誘って楽しんでボランティア活動をする元気な高齢者もいるとのこと。また、行政主催の市内の子ども食堂

連携会議に参加し、学習支援を利用する子どもたちにお弁当を提供することになり、子どもたちが喜んでくれているという声も届いたそうです。今後も、多世代の方々が気軽に交流できる、ボランティアが楽しく活動できる、誰もが立ち寄れる居場所づくりを目指して活動していきます、とうれしい報告をいただきました。



作業の様子と収穫した野菜

環境に配慮した畑で野菜作り 近隣住民とのふれあいの場に

愛知県春日井市

ミライツナグ

助成金額 15万円

2022年設立の「ミライツナグ」は、「子どもも大人も自分らしく輝いて生きていこう」「周りと助け合って生きていこう」「地球と共生して生きていこう」を理念として活動を行ってきましたが、24年に地域住民から畑を借りられることになり、理念に沿った畑の活動を開始しました。

経験者がいない中、社協担当者や市内のコミユニティファームの活動を支えている人たちの協力や指導の下、いつでも誰でも参加できる近隣の人とつながって楽しむ「みんなの畑」、真剣に畑を学んで一から自分でやってみたい「わたしの畑」の2種類を用意し、無農薬・無化学肥料を使用して環境に負担を

かけない畑を目指しました。

畑の初心者ばかりが集まり一から活動を始めたため、今回の助成金では、耕運機やスコップ等の農具一式、畑作業消耗品、畑の看板や種苗等を購入していただきました。参加者も小さな子の親子連れから高齢者までさまざま。作業していると近所の人が声をかけてくれたり畑のことを教えてくれたりすることもあり、活動の良さを感じているということです。

今後はもっとたくさんの人たちに参加してもらうためにSNSとチラシで広報活動を進め、土に触れる機会の提供をするともに、安心安全な物を自分で作って食べることで地球環境に配慮することを継続的に自然に伝えていけたらいいな、と考えているそうです。

三重県伊勢市

安心して住み続けるための居場所 SCも活動をサポート

集いの場・みやがわ

助成金額 9万6000円

伊勢市西口町会が高齢化が進み、認知症の人も多く見受

けられる地域。「集いの場・みやがわ」は、皆が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることを目的に2016年から週2回開催。地域包括支援センターのSCも定期的に来所してサポートしているそうです。地元のクリニックの建物が空き家になっていたため安価で借り受け、内部を自分たちで修繕し今日に至っていますが、トイレに手すりをつけてほしいとの要望があり、また玄関が階段になっていることで通所者が建物に入る際にはボランティアスタッフの手助けが必要でした。このため今回の助成金では、トイレ内と玄関の上り階



設置された玄関の手すりと、「集いの場・みやがわ」で過ごす皆さん

「地域助け合い基金」 状況のご報告

地域助け合い基金は、地域住民の活動とともに能登半島地震の被災地・被災者にも支援を実施しています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願ひ申し上げます。

(11月15日) 当財団ホームページ開示時点
◎寄付受付額 248件 1億9434万337円
このうち当財団より1億6162万1000円を供出
◎助成実行額 1207件 1億8582万6965円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問合せ

地域助け合い基金
担当

電話：(03) 5470-7751

FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

段のそれぞれ2か所に手すりを設置し、安全対策が強化されたそうです。

「みやがわ」は町会長、民生委員、老人会の副会長の3名で運営をしています。ボランティアアスタツフは民生委員・児童委員、自治会の役員等で構成しているので、地域とのつながりも深く、さまざまに取り組みをしていく上で

とても役に立っています。しかし、80歳を超えているスタッフが多く、無償ボランティアで人が集まりにくくなっていくことなどから、活動が今後継続していけるか危惧しているとのこと。若手のボランティアを増やし、高齢者が一日でも長く健康で過ごし、認知症等になるのを遅らせられれば、と報告をいただきました。

— 認知症との
新しい向き合い方

社会医療法人財団石心会理事長
川崎幸クリニック院長

杉山 孝博



(すぎやま たかひろ)

1973年東京大学医学部卒。1998年9月川崎幸クリニックス院長に、2023年7月社会医療法人財団石心会理事長に就任。1981年から公益社団法人認知症の人と家族の会の活動に参加。全国本部の副代表理事(副代表)。公益社団法人日本認知症グループホーム協会顧問、公益財団法人さわやか福祉財団評議員。著書は、杉山孝博著「マンガでわかる 認知症の9大法則と1原則」(法研)、杉山孝博監修「認知症の人の不可解な行動がわかる本」(講談社)など多数。

認知症の症状と、 認知症の人の世界を理解する

— その3 —

認知症の人には、「あることに集中すると、そこから抜け出せない。周りの人が説明したり説得したり否定したりすればするほど、こだわり続ける」という特徴がみられます。

人と人の間に何らかのこだわりが生じた場合、相手を説得したり、説明したり、否定したりしてそのこだわりを解消しようとはします。しかし、認知症の世界ではこの方法は多くの場合有効ではありません。それでは、どのようにしたらよいかを考えてみま

しょう。

「身近な人に激しい症状を示し、他人にはしつかりした言動をする」という認知症の特徴を応用するのは、「年金が無断で使われている」と思い込んでいる認知症の人に対して、当事者である家族が通帳を見せながら、「1円も引かれていないでしょう」と説明しても信じません。しかし、郵便局員や銀行員が「大丈夫ですよ」と言うとう安心します。いわゆる社会的権威者、目上の者、介護者以外の家族など



の言うことは受け入れやすいので、そのような人たちが登場するシナリオを作ることとかわりが軽くなるものです。

説得するよりも、「お母さんの好きな歌を聞かせてください」「洗濯物をたたむを手伝っていただけませんか。お願いします」というように別なことに関心を向けさせると、興奮やこだわりが和らぎ、好きな歌を楽しそうに歌い、洗濯物をせせとたたみ始めることもあります。田舎の生活、会社での仕事、子育て、戦争体験のある人なら戦時中のことなど、昔の思い出も場面の切り替えに有効です。

夜間の騒音、ごみ出し、徘徊、隣人への被害妄想など、地域社会とのかかわりをもつ認知症の症状は少なくありません。こんな時、家族は、「遠慮」「兼ねね」「陳謝」など、近所への気遣いという重荷を背負うこととなります。近所への迷惑を考えて、鍵をかけて外出できないようにする、薬を使って興奮を静める、言い聞かせるなどの対応をしてもうまくいかず、混乱を深めることになりかねません。逆に、

地域の理解があれば深刻な症状が軽くなります。

「義父が近所の薬局で石鹼を万引きしていることに気付いたとき、目の前が真っ暗になりました。先生のお勧めによって、石鹼を持ってお店の方に事情を話しましたら、『大変ですね。私たちも注意しますが、石鹼が見つかったら返していただければ結構です』と言っていたいてほっとしました」。これは私が訪問診療をしていた介護者の体験です。

「明日はわが身」「お互いさま」という理解が地域に根付いてくれば、「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」が可能になると確信しています。

認知症の症状の多くは、1〜2年で別な症状に変わっていくという特徴があります。介護者に「1〜2年前に困っていた症状は何ですか」と尋ねると、多くの人は現在困っている症状とは違った症状を答えます。それを確認した上で、「現在の症状も長くは続かないと思います。何年も続くものと決めつけないで、気楽に考えませんか」と説明すると納得します。

(次号に続く)

「老いる」を支える

認知症①

公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

2015年度から特養ホームの入居条件が要介護3・4・5となつて、認知症の人が増えてきました。

ほとんどの人が人生最期のステージに何を望んでいるのか言葉で伝えることはできなくなつており、意向を書面で書いている人もほとんどいません。

職員は表情や態度から何を望んでいるのかを推測し試行錯誤しながら、支援している日々です。

約10年前になりますが、Uビジョン研究所が認証する特養ホームにアルツハイマー型認知症の診断を受けた70歳台の女性が入居しました。数カ所の施設



(ほんま いくこ)

図書館情報大学卒業（現筑波大学）。さわやか福祉財団評議員、学校法人光塩学園評議員。利用者の人権を守るための高齢者生活施設の認証・評価事業を創設。全国の介護施設や市民向けセミナー講師を務める。ハ表彰V2005年国際ソロプチミスト東京受賞、2010年エイボン女性大賞受賞。ハ著書V多数。近著『この一冊でわかる特別養護老人ホームを選ぶチェックポイント』（30ページ）。お申し込みはAmazonかUビジョン研究所（電話03・6904・4611）へ

から断られ家族は必死で受入れ先を探していました。

職員は多くの認知症の人を支援した経験をもち知識もあり、大丈夫だという気持ちでいました。しかしながら今回は違いました。彼女の日々怒りに満ちた感情は、険しい顔を見ただけでわかります。対応方法を模索するカンファレンスは毎日続きました。

暴言、暴力行為は職員だけにではなく利用者や訪れてくる家族にも向けられました。職員の対応が気に入らないと怒鳴り殴ろうとし、時には追い回します。食堂で自分がいつも座っている場所に他の利用

者が座っていると、「どけっ、ここは私の席だ」と言い、その人が「席は決まっていけないよ。どこに座ってもいいんだよ」と言い返すとすぐに手が出ます。それを上手くかわした瞬間に自分が倒れてしまい腕を骨折したこともありました。

職員たちは、自分の思いが伝わらない悔しさともどかしさで彼女もまた苦しんでいるのだと思いつつも、それが何なのか想像できず時間が経っていきます。少なくとも職員一人で抱え込まないよう、いつでも相談できる体制をつくりました。

入居してから1年過ぎたころ、職員がアルツハイマー型認知症と異なるのではないかと疑問を持ち、



ある専門病院をみつけて家族に相談し受診しました。そこでは、アルツハイマー病は誤診でピック病とレビー小体型認知症と診断されました。それからは専門医と職員が電話で相談できるようになり、症状によつて薬の種類も量も変わりました。時間はかかりましたが、彼女から少しずつ思いやりのある言動が感じられ、笑顔も見せるようになりました。

担当した20代の職員は、「プライドを持ち、一生懸命生きている人だということを職員が共有し、敬意をもって私たちもまた一生懸命向かい合ってきました。そのような時間の積み重ねが信頼関係につながっているのではないかと思います」と話していました。

コロナ感染が発生して4年半以上経ち、地域のボランティアは少なくなるところがいなくなったホームが増えています。近所の人たちが特養ホームを気軽に訪れ、お花の水を入れ替える活動などを通してつながりを持つことで、いろいろな老い方を学ぶ機会にもなります。

助け合いの地域づくりに、 当財団のツールをぜひご活用ください

当財団HPトップページ「ライブラリー」→「各種広報ツール」から無料でダウンロードもできます。「新・助け合い体験ゲーム」は1,100円（税込・送料別）となります。

みんなでやってみよう！ 訪問助け合い活動

お互い様の気持ちを一歩進めて、自身の生活も、困っている誰かの生活も豊かにする「訪問助け合い活動」。主に高齢者の家の中で行う助け合い活動について詳しく解説しています。講師用解説書もあります。



いつでも誰でも行ける場所を 広げよう！ 居場所ガイドブック

地域の絆を深め、助け合う関係を広げるための共生型常設型居場所をつくりましょう。居場所のつくり方、事例、活動への支援のあり方など、実践ノウハウが分かるガイドブックです。



新・助け合い体験ゲーム

地域の助け合い活動における、ニーズと担い手発掘を体験できるゲームです。助け合いをつくる関係者の研修や住民勉強会等で、効果的に活用していただけます。



【お問い合わせ・お申し込み】

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **さわやか活動日記（抄）**



さわやか活動日記(抄)

column

特別支援学校の 就業体験受け入れを通じて

事務局長 大石 敏晴

「できました！」

少しうれしそうな生徒の
声が財団事務所内に響く。
お願いしていた作業が終わ
ったことを担当の職員に告
げたのだ。宛名ラベルがず
れることなく貼られた数十
枚の封筒は、きちんと向き
がそろい、整えられた束と
なって渡された。

当財団では年に数回、特
別支援学校の生徒を就業体
験で受け入れている。学校

からは、生徒が自己の進路
に関心を持ち、可能な限り
社会参加・自立していける
よう就業体験を計画してい
ると聞く。また、生徒が自
分一人で通って、実際の職
場の雰囲気を知ること、実
社会の中で働くことの意味
や厳しさを知ること、社会
人としての心構えや職場で
のルールを理解することだ
が、財団職員にとっても生

徒と接し、あらためてそれ
ぞれの個性が尊重されなが
ら共生しているインクルー
シブな社会を心に刻む良い
機会となっている。

実習期間は3日間と短い
が、生徒にとっては何とも
長い3日間だろうと思う。
毎回、体験してもらおう仕事
を事前に紙に書いて渡して
いるが、初めてする事務仕
事の上に、大人の中に混じ
っているだけでも緊張の連
続だろう。そんな緊張をほ
ぐすつもりで、就業体験の
初日、仕事内容の説明とは
別に、事前面談で気づいた

ことから生徒に3つの約束
を提案した。

1つ目は、大きな声での
あいさつ。職場での朝と帰
りに大きな声でしっかりす
ること。2つ目は、返事の
仕方。仕事中は「うん」で
はなく「はい」。3つ目は、
職員の名前をできるだけ覚
えること。財団に来て、3
日間、仕事(作業)だけを
して帰ったのではつまらな
い。まだ早いかもしれない
が、楽しく仕事をするため
には、一緒に働く人との信
頼関係と良好なコミュニケ
ーションが必要ということ

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホーム
ページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCII生活支援コーディネーター

を覚えてほしくて、一緒に働いている人の名前を覚えて、興味を持って、できれば自分から声をかけられるようになってくれたらいいなどと思って話をした。

仕事の内容は、冒頭の作業など事務の補助作業全般や、パソコンでの書類作成など。集中しすぎて疲れてしまいひと休みすることもありますが、各作業はきっちりやり遂げる。1日目は、ブレザーのボタンを掛け違えるほど緊張していたが、2日目には、にこやかな笑顔が見えはじめ、1つ作業を終えると元気よく完了報告ができるようになった。3日目ともなると、作業を終え報告する顔は自信に満ち頼もしくも見えてくる。

かくして3日間はあっという間に過ぎ、生徒は高校生らしいはつらつとしたあいさつをして就業体験を終えた。

今回の実習で、社会に出ることの不安に打ち勝つような自信や成功体験を持たせようか、そんな思いを巡らせているうちに生徒から手紙が届いた。

「作業は難しかったです、思い出に残っていることは、押印作業できれいにできたことです。皆様から教えていただいたことを学校でも生かし、次回の就業体験に向けて頑張ります」とあった。ホッと一息つくとともに、これからも多くの生徒を応援したい気持ちが強くなった。

* * *

当財団が特別支援学校の就業体験に協力し始めてから20年超が経過し、これまで7校の特別支援学校から計84名の生徒を受け入れ社会体験を育む支援をしてきました。当財団は、新しいふれあい社会をつくりたいという思いで、全国の住民の皆さんが主体となる助け合いのつながりづくりを働きかけ、活動を支援させていただいています。この特別支援学校の就業体験を受け入れ、研修の場を設けることも、新しいふれあい社会に通ずる活動の一つと考え続けてきました。

これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった生徒たちが、積

極的に参加・貢献していくことができる社会をつくりたい。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様なあり方を認め合える全員参加型の社会です。それが共生社会であり、私たちがつくりたい新しいふれあい社会なのだと思えます。

こうした交流がもっと自然に増えていってほしいと願い、これからも特別支援学校の生徒たちの学習の助けになるよう就業体験の場を提供していきます。



ふれあい推進事業

「こんな活動を始めたい」

第2層協議体が集まりグループワーク

■市川三郷町（山梨県）

【10月11日】山梨県のアドバイザー派遣事業で、市川三郷町を支援。同町は昨年度、フォーラムから勉強会を重ね、主体的な住民で第2層協議体を3地区（旧町単位）で立ち上げた。その後、第2層協議体「支え合いを考える会」をそれぞれの地区で2回開催して助け合いを広める理解を深め、ニーズについて話し合ってきた。今回は3地区の協議体が集まり、各地区の状況を共有して具体的な取り組み



みの計画を話し合うことを狙いとし、3回目の「支え合いを考える会」が行われた。なお、協議体は勉強会から思いのある人たちが中心となり動き出しているが、随時参加を呼びかけながら進めている。

今回の目的は、①1・2回目をふまえ、支え合い活動を広める上で、自分に来ること、自分の所属する団体で出来ること、呼びかけたい他の団体等があるのか整理を図る ②住民が主

体となった助け合い活動の創出 ③継続的に支え合い、助け合いの視点から地域づくりを考える場を広める。

冒頭、行政からあいさつとオリエンテーションが行われた。次に第2層SCの一人である佐野泰史氏が、1・2回目の振り返り、各地区の特徴やあったらいいなどと思う活動について、実施してみてもの気づきなどを報告。また、各地区から住民代表1名ずつが活動について発表した。

次にグループワーク「こんな活動を始めたい」を実施。各地区に分かれ、あったらいいと思う活動の具体化に向けてワークシートを基に話し合い、取り組みの目的や対象、企画作成

等を行った。

発表を受けて当財団より、発表された内容と次の展開に向けて「第2層協議体を中心とした助け合い地域づくりの推進に向けて」と題し情報提供した。協議体の役割は「助け合いを広めること」とし、そのために、1・住民のニーズを掘り起こす（何を求めているか、何に困っているか、真のニーズとは何か）2・仲間づくり（理念に賛同する仲間を広げる。仲良しクラブではない、理解者を増やす）について事例とともにポイントを伝えた。最後に、住民主体の助け合い活動が広がっていくことによる効果についても事例を交えて伝え、「協議体メンバーの人

脈や知恵を生かし、みんな
で取り組み、地域の住民に
働きかけてみよう！ 行動
あるのみ」と伝えた。

アンケートには、「3地
区の差が出ていた↓課題が
異なる↓活動が異なる。地
区の特性に応じた活動が始
まるとよい」「仲間を増や
す。担い手を確保すること
難しいけど、やる気のある
人からスタートできればと
感じた」「住民が何に困っ
ているのか、多様な内容の
中で、目的や理念に賛同す
る仲間を広げ、自由を利用
でき集える場所・拠点を設
置して、私はこんなことを
してほしい、こんな手伝い
ができる・したい、何でも
気安く話ができる雰囲気づ
くりからスタートして進め

てみるこの大切さを学ん
だ」等の感想があった。

協議体の立ち上げを充て
職にせず、勉強会で理解を
深めながら気持ちのある人
たちで立ち上げ、仲間を広
げて取り組んでいるためか、

■ 助け合い活動を広げよう

■ 西海市（長崎県）

【10月20日】西海市大島地
区で西海市全体の市民フォ
ーラムが開催され、大島地
区を中心に市内全地区から
200名ほどの住民が参加
した。企画運営は市地域包
括支援センター、第1層S
C・協議体、第2層SC、
市社会福祉協議会。同市は
第2層エリアごとに年1回
のペースでフォーラムを開

情報提供しながら話し合っ
てもらおうと活力がアップし、
具体的な行動が始まると感
じた。地域に働きかけてい
くこれからの動きに期待が
持てると実感した。

（鶴山 芳子）

市民フォーラム開催

催しており、今回が4回目。
コロナが収束してきた昨年
度からは市全体に呼びかけ
て開催してきた。フォーラ
ム後には4回の勉強会を重
ね、居場所や生活支援など
が立ち上がり始めている。

最初に杉澤泰彦市長と北
島淳朗協議体会長からあい
さつがあり、行政による市
の現状と課題の説明があっ

た。続いて「広げよう っ
なげよう地域助け合い」自
分たちの住む地域を、自分
たちで良くしていこう」と
題し、当財団が講演した。

4年前のフォーラムから住
民のニーズや思いを掘り起
こし、勉強会で種をまき助
け合い活動が広がり始めて
いるが、喫緊の課題である
移動支援について、勉強会
も行っているがなかなか活
動が立ち上がらないこのこ
と。制度は住民主体で取り
組みやすくなってきている
実情を伝えながら、助け合
いで移動支援に取り組んで
いる事例を紹介し、タクシ
ーではない助け合いの範疇
で取り組んでいることや、
そのための勉強会や試行等
も行い、不安を払拭して取



西海市フォーラムでのパネルディスカッションの様子

り組んでいることを伝えた。「今は乗り合っているから移動支援はいらない」という市内の住民たちの声を紹介し、人と人とのつながりや信頼関係がまだまだあることは西海市の強みであることや、強みを生かしなが

らさらに若い世代までのつながりや信頼関係を広げていくことも重要、と話し、他県の世代を超えた話し合いの事例を紹介した。パネルディスカッションは財団の進行で、第2層SCと地区ごとの助け合い実践者にそれぞれの取り組みを発表してもらった。取り組んでいてうれしかったことなどを紹介してもらい、課題についてSCがどう関与して解決していくかなど、「助け合いを広げること」を目的に行った。発表者のいきいきとした表情と発言

に会場から「頑張れ〜！」と拍手が起こったり、市への要望については市長が手を挙げて応えるなど、和気あいあいと進行した。同市は11月から月1回の勉強会を4回開催する。継続して地域に働きかけ、ま

いた種が芽を出し花を咲かせ始めている。また、協議体やSCの理解とモチベーションもアップしてきていると感じる。これからも応援していきたい。

(鶴山 芳子)

住民主体の地域づくりへ 住民主体団体情報交換・交流会

■ 岬町（大阪府）

【10月31日】岬町で行われた、令和6年度地域支援団体ネットワーク会議企画「住民主体団体情報交換・交流会」に当財団も協力した。地域支援団体のネットワークの継続・強化をテーマに、①岬町内で活動を行っている住民主体の団体の

情報交換・交流を通じて、地域の誰でも参加できるように、また、高齢者等の暮らしを支え合い、助け合う活動が広がるよう底上げを図る、②住民同士が声かけをし、お互いの活動を後押しする等住民主体の地域づくりに向けて行い、③介護予

防等社会資源の創出につながるよう共通認識の向上を促進する、を目的として実施された。参加者は、地域活動団体のメンバー、協議体メンバー、行政、町社協。財団より「自分が支える地域は、自分を支えてくれる地域」と題して講義。次に、参加8団体から住民主体で行っている活動の内容、工夫していること、苦労していることについて紹介。住民の思いが詰まった活動が紹介された。

その後、グループワーク。テーマは、①5年後どういう地域になつていればいいのか、②自分たちで立ち上げていった活動が5年後どうなつていったらいいのか、③そのためにどうしたらいい

のか。気軽に交流できるようなお茶とお菓子が出され、和気あいあいと話が弾んだ。住民同士が支え合う関係を築くことで、住民自らが生活課題や福祉課題の解決を図れる組織や仕組みをつくろうと取り組んでいる同町。活動者同士の情報交換の場をつくり、支援が必要であるのに声を上げられず困り事を抱え孤立している人が、地域に受け止めてくれる人や場所ができることで安心して暮らせる共生の町づくりを目指している。

このたくましい住民の活動を広げるために、SCや行政、社協が後方支援を行う体制づくりが進んでいると感じる。情報交換の場で住民が主体的に取り組んでい

る活動をアウトプットすることで、他の参加者に新たな気づきを生み、つながりが生まれる。たくさんの方が創出されている同町の取り組みを、引き続き財団も伴走支援しながら、情報を共有・発信していく。

(目崎 智恵子)

社会参加推進事業

ボランティア・ベンダー協会

第31期定時総会に出席

【10月28日】当財団の清水肇子理事長が理事長を務めるボランティア・ベンダー協会第31期定時総会が株式会社八洋にて開催された。1994年に創立された同協会は、自動販売機を通じ

た募金から公益団体に寄付を行う任意団体で、今年30周年を迎えた。飲料1本につき、自販機設置オーナー、飲料メーカー、自販機事業運営会社から各1円の合計3円が、自販機設置オーナーの希望する公益団体に寄付される仕組みである。現在、全国でこの自販機は2500台設置されている。社会福祉、子ども、環境、地域などの分野で毎年58団体へ寄付が行われ、創立以来総額1億8000万円を越える寄付が実行された。

この日は、財団より清水理事長と玉置、ボランティア・ベンダー協会2名、八洋様5名、飲料ベンダー企業より8名の計17名が参加。総会開催にあたり清水理事

長が「31年目を迎えるこの素晴らしい仕組みをより広げて、寄付文化の継承をさらに進めていきたい」とあいさつし、第31期予算及び運営計画は原案通り承認された。

飲料を購入するだけでなくさまざまな分野への寄付につながるこの仕組みを、財団も引き続き応援し、広げていきたい。

(玉置 英明)



情報・調査事業

一般介護予防に係る 第1回検討会に出席

〔10月17日〕「第10期介護保険事業計画を見据えた一般介護予防事業等の充実を図るための課題整理に関する

調査研究事業」の第1回検討会が開催され、委員として出席した。一般介護予防事業は令和元年度に検討会が行われ、全国の自治体で事業が推進されているが、その後の実態把握を目的にした調査を行う予定であり、近藤尚己座長（京都大学大学院教授）の進行により6名（医療、専門職、行政、研究職等）の委員それぞれの立場から議論を行った。

当財団は、住民の立場で共生型常設型居場所を推進してきたことや、生活支援体制整備事業に関与

「ふくしま避難者交流会」開催

10月26日、「ふくしま避難者交流会」が東京・有楽町の東京国際フォーラムで開催された（主催：福島県、共催：東京都・当財団）。

この交流会は、東日本大震災により福島県から首都圏（東京、千葉、埼玉）に避難されている方々を対象とし、避難者同士の交流や、避難者とふるさと福島との絆を深める機会となるよう例年開催されてきた。今年度は避難者38名が参加し、福島市、南相馬市、楡葉町、富岡町、大熊町、浪江町の各自治体職員から、復興状況、各市町の最新情報が報告された。続いて、大熊町の現地と映像をつなぎ、帰還者、移住者などから生活について生の声を聴く機会が設けられた。その後、交流のためのクイズや健康体操（フラダンス）、クラフト体験、市町村情報コーナーでの相談会などが行われ終了した。

参加者同士が楽しそうに交歓する姿や、ふるさとの自治体職員と会話する姿が見られ、良い交流会になったと感じる。財団も、引き続き避難者の皆さんに対してさまざまな形で支援を継続していきたい。

(大石 敏晴)

して各地で住民主体の地域づくりを推進してきた立場から、「住民のニーズから

つくり、継続していくことで生まれる効果という視点
が大切。評価は中長期で見

ることも大切ではないか」等の意見を述べた。また、自己決定を大切にして専門職と連携している居場所が敷居の低い相談の場になっている事例を紹介しながら、「住民に寄り添うさりげない支援の大切さ」を伝えた。都市部、地方における「通いの場」の捉え方について

厚生労働省 地域づくり加速化事業 2回目の伴走的支援に協力

■長岡市（新潟県）

【10月28日】長岡市で地域づくり加速化事業の2回目の支援が実施され、協力した。

同市では8月末に1回目の現地支援があり、さまざまな気づきを基に事業所間

は、「さまざまな違いはあるものの、共通するのは孤立の問題。世代を超えたつながりをつくるのが重要」「住民の声も調査に反映してはどうか」ということも発言した。

今後は調査票の確定に向けて議論を進めていく。

（鶴山 芳子）



の情報交換会を開くなど動き出している。10月初めに1・5ミーティングでその動きを支援チームと市で共有し、今回の支援内容を議論した。今回支援の狙いは、総合事業のメニューの中で

短期集中予防サービス（通所型サービスC）の役割や目的、対象者像について関係者が共通認識を図ること。

午前中に市関係者と支援チームでプログラムの内容を共有し伝えることのポイントやグループワークの進め方などについて議論。午後には市内各地域包括支援センター職員、事業所、行政が5グループに分かれ、上記狙いに向けて議論し、共通理解を持つことを目指した。最初に関東信越厚生局の齊藤康博課長から「短期集中予防サービスを含む総合事業の制度説明」が行われた。次に「介護予防に関する情報提供」として、山田実アドバイザー（筑波大学教授）が講話を行った。続

いて長岡市が「市の現状と課題、長岡市をより良くするための事業設計案」を説明し、皆で共有した。

グループワークではまず、制度説明や効果などの講話を聞いての気づきを共有。次にサービスCを利用してどのような状態になってほしいか、また、サービスCの効果等について議論した。さらにサービスCを必要とする対象者への周知についても知恵を出し合った。講話と議論をしたことにより「なぜ介護予防なのか」「なぜサービスCが必要なのか」という基本的なことをあらためて共有でき、介護予防の取り組みの重要性について気づきも共有できたとのこと。また、それぞ

れが市民のためにという思いで行動していることの強みなど、さまざまな気づきも生まれた。

議論では「人に迷惑をかけたくない」という住民の思いも各グループから出され、そこも生かして適切な住民への理解や周知につながるということができればと感じた。同市は今後、ロードマップの作成等にも取り組んでいきたいとのこと、支援チーム皆でバックアップしていきたい。(鶴山 芳子)

事務局

東京都立水元小合学園 より就業体験

【10月29～31日】東京都立水元小合学園高等部1年生

の生徒1名が3日間、当財団で就業体験を行った。事務作業の就業体験は初めてとのこと、最初は不安や緊張もあったと思うが、出勤時間、あいさつ、仕事に対する姿勢はすでに身に付けていた。不慣れな環境の中でも、事務の補助作業全般、パソコンでの書類作成など、どの作業内容も短時間で覚え一つ一つ確実に進めてくれた。また、手書きのポスター作りでは、創意工夫をして取り組んでくれた。休憩時間には緊張もほぐれ、他の職員と笑顔でコミュニケーションを取り、有意義な時間を過ごしていた様子。とても良い形で就業体験を修了してくれたと思う。(齋藤)

いつもご支援をありがとうございます
今年もさわやかパートナーにお贈りしました

例年、さわやかパートナーとして20年間ご支援くださいました皆様へ、心ばかりですが永年のご支援に対する感謝状を贈らせていただいております、今年も財団設立月である11月にお贈りしました。

今後も新しいふれあい社会づくりを一丸となって進めてまいります。どうぞ引き続きご支援を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

さわやかの友
様

これまで長い間新しいふれあい社会づくりをあなたと一緒にやってこられたことをとても誇りに思っています

令和6年 11月
東京都立水元小合学園
理事 清水 肇子

事務所 より

●今年も大変多くのあなたかなつながりを実感した一年となった。会費や寄付をお寄せくださった方、各地各活動でお会いした方、フェスタにご登壇いただいた方等々、こうしたつながりは財団職員の大きな原動力となっている。来年も応援よろしくお願ひします！

みんなの広場



投稿募集

皆様のご意見や情報を お待ちしております

掲載記事へのご感想、地域の助け合いや居場所の情報、社会参加の取り組みや、日頃気になっているテーマなど、ぜひお寄せください。

送付先

さわやか福祉財団『さあ、言おう』編集部宛。郵送の場合は、付属のハガキや投稿用紙をどうぞご利用ください。

E-mail :
pr@sawayakazaidan.or.jp



地域の助け合い活動、大変有益な活動であると思います。私の住む町でも、町内の役員会の集まりでは高齢者の見守りについて話題になっております。目下のところ、特に事件になるようなことはありませんが、高齢化が進むにつれ空き家が増えて

私のまちでも
空き家問題

高嶋 宏臣さん

兵庫県
兵庫

きているのが問題です。いつまでも明るく楽しく暮らせるようにと、毎年、春の桜祭り、秋の文化祭などを開催しています。私は防災防犯委員なので、兵庫県警や宝塚警察とも打ち合わせ、防災防犯啓発活動を行っています。

いつもご意見をありがとうございます。防災活動と日頃からの助け合いが上手くなるよう期待しています。

みんなで
新しいふれあい社会を
つくりませんか



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856*

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵は はり絵・池田げんえい



編集後記 ●11月号に続き、「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」の報告を掲載しました(P3~)。●「活動の現場から」はURの団地が舞台。多彩な人たちが訪れて、居心地の良い場所づくりをしています(P12~)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は大分県竹田市。居場所に福祉事業も入れることで多様性が増しています(P18~)。●「実家の茶の間・紫竹」が10月30日に最終日を迎えました(P24~)。●本年も大変お世話になり、ありがとうございました。良いお年をお迎えください。

助け合いを
広げよう!



濱島 淑恵

中学生の時、この世に「差別」があることを知り、

ショックを受けました。

しかし、それ以上にショックだったのは、

そのことを知らずに生きてきた自分の「無知」でした。

道に迷う時、問いかけます。

「自分はわかっている」という傲慢さを

脱ぎ捨てられているのか。

困難を抱える人と自分を隔てて理解していないか。

その人は、私自身であり、あなたでもあるのだ、と。



- 大阪公立大学大学院現代システム科学研究科社会福祉分野教授
ヤングケアラーに関する調査研究を行うとともに、近年は有志と「NPO法人ふうせんの会」を立ち上げ、ヤングケアラーの交流会や支援活動にも携わっています。SNS、HPがありますので、ご覧いただけると嬉しいです。

（あきお） 12月号

通巻376号 2024年12月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
取材協力 七七舎
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

茶の間の絵本

『未来につなごう 地域の茶の間』が 発行されました



「実家の茶の間・紫竹」が10月末で終了し、このほど絵本『未来につなごう 地域の茶の間』が発行されました。30年以上にわたる活動から地域共生社会のモデルとなった茶の間の知恵と工夫を伝え、居場所づくりの背中を押す一冊です。

※本文24～27ページ

「実家の茶の間・紫竹」終了プログラムもご覧ください。



企画・「地域の茶の間」
絵本プロジェクト

文・寺島 純子

絵・大越 理恵

発行・株式会社博進堂
1,650円(税込)



◆ 購入は「博進堂Yahoo!店」(左記のキーワードで検索)にて

◆ 問合せ 株式会社博進堂 TEL (025) 271-4300 (9～17時 土・日・祝を除く)